

私の人生の半分以上を共にしてきた「道」がある。それは、「柔道」だ。

「道」についての定義は人それぞれであるだろうし、辞書でさえ、様々な意味を示している。だから、物理的な一本「道」、伝統の茶「道」や 剣「道」、「道」は人によって色も形も長さも変化する。

そんな「道」の中で、私が大切にしてきた「柔道」とはなにか。私はこの言葉の意味を理解し、自己解釈をするということは、とても難しいことだと考える。

私は六歳から道場に通い始めた。高校生となって今でもなお、畳を踏みしめて部活動で柔道の稽古に励んでいる。十一年。私の成長と共に、自分の中で何度も何度も形を変えている。柔道という「道」を掴めるようになってきたのも本当に最近のことだった。

幼い頃、こんなに疲れて痛くて辛い稽古が「柔らかい」「道」であってたまるか、とずっと考えていた。それから少し成長し、ただの物理的な「柔らかさ」や精神的な余裕の「柔らかさ」ではないことを知る。父から「柔を能く剛を制す」という言葉が柔道に通ずるものであると教えてもらった。柔らかくしなやかな者こそが、かえって剛強な者に勝つことができるという意味だ。年数を重ねる度にこの言葉は腑に落ち、柔道を理解し始めるようになった。そのきっかけとなったのは中学生時代の部活動の影響が大きい。当時、私は特設柔道部に所属していたため、支えてくださる人々への感謝を何度も感じ、伝えていた。自分のことだけでなく、人を敬い、礼儀を重んじること。これこそが柔らかさではないかと気づいた。

思い返すと、震災後の被災地支援で、岩手県に日本代表の選手が訪れ、ふれあったことがあった。人を想い、自分の力を他人の為に利用する。「柔道」をする上で求められる「柔らかさ」というのは、周りを大切にすることや精神のことを言うのだろうか。

「柔」に対し、「道」とは何か。それは「理想像」や「人生」のことを表すのだろうか。「柔道」の「道」の形は「柔」の解釈によって、変化していくのだろうか。この二文字が合体することで厳しい現代社会にも通ずる芯が生まれる。ここでの芯は、厳しい練習や相手を敬う習慣によって身につく、「自分を律し、弱きを助ける強さ」を言う。

柔道はただの体づくりではなく、人間教育のためのものだ。柔らかさとしなやかさを持ち合わせた人こそ、強く生きていけるのだ。ただ柔道をするから、続けるから柔の「道」を進めるとは限らない。私は来年の部活引退と共に柔道から離れるだろう。それでも、私の人生を彩る道は、柔の「道」が色濃く残るような人間でありたいと強く望む。